

教務だより

2014年3月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

受験が終わり新しいスタート

茗溪塾塾長 宇野 雅春

今年の受験の最大の特徴は、ソチオリンピックと同時並行に動いたということです。地道な努力が大きく実を結ぶ選手がいる一方で、本番までの前評判にもかかわらず小さなミスでメダルを逃がした選手もいました。そういう点で「受験」と重なるところがたくさんありました。中でも、浅田真央のショートプログラムでの思わぬ失敗から、完璧に近いフリーの感動的な演技が、千葉県公立高校の前期入試と後期入試に重なり、前期入試での不合格から後期入試に向かう厳しい一週間の中で大いに勇気づけられる生徒がいました。いずれにしても、普段の大きな努力の結果の上に、成否が試される厳しさは、オリンピックも入試も同じことに思えてなりません。

毎年、突然終わってしまった「入試」からすぐ始まる新しい年度に対応しきれない気持ちになるのですが、今年は、「卒塾面談」を実施することで、気持ちの区切りがきちんとつけられました。例年ですと受験後、もう会うことがない生徒も多く、数年間気持ちにしこりが残ってしまうことも多くありました。終わった後、次をどうするのかを互いに確かめることは、お互いの次のスタートを切る上で、特に重要だと思います。

それは、人生は成功だけで成り立つものではないからです。失敗をし、それが次の大きな原動力となり、次より大きな「成功」をつくるのだと思います。失敗を、自分の問題としてとらえず、誰かのせいにしてしまうと、同じ失敗を何度も繰り返すことになります。そして、一番悪いのが、運だけでさして努力もせずに「成功」をつかみとっている場合です。そういう人はいつか大きな試練に立たされることになります。

いずれにしても、そんなに良いことばかりがあるわけではないのです。喜びがあり、苦しさもあり、そして「もう限界」という時期もあり、人生は過ぎていくのだと思います。ただ言えることは、努力をともなわない人生ほど、味気ないものだという事です。「卒塾面談」を通して次の課題を確認することは、そういう意味で意義がありました。

「受験勉強」の時期をどう過ごすのか、これは大切なことです。今たぶん、受験を指導してきた先生達が考えていることは、次は、もっとよりよい方向でやりきりたいということです。「あの時、こうすれば良かった」とか「やはり…。もう少し〇〇していれば…」、あれこれ、頭の中を廻っているのです。なぜかという、受験というものはあるべきたった一つの「正解」に向けてとことん準備していくものだからです。ドラゴン桜の最終回の桜木先生の言葉を借りれば、「受験の正解はただ一つ、しかし人生の正解は一つではない」ということなのですが、今回は、受験に絞って、今年考えたことを最後にまとめてみます。

変化してきているのが、高校入試です。公立高校の競争が厳しくなっており、内申プラス実力の両方が、厳しく問われる入試になっています。理科社会には顕著ですが、実力養成型の塾の授業抜きで、合格は難しい印象を受けました。また、中堅クラスから下にかけての都立入試では、塾に通っていない生徒が、学習のモチベーションをいかに維持していくのかを想像して、その難しさを感じました。上位校では、努力していても、やむを得ないミスによる不合格は当然出てきますし、ずっと安易な気持ちで勉強している中堅校希望者にとっても、厳しい入試になっていると思います。受験の準備がより緻密になり課題が多くなってきている印象は否めません。自分の目標達成のためには早い時期からの準備が大切です。大学受験の厳しさを考えると、首都圏の大学付属高校は、非常にメリットが大きいと思います。首都圏という有利な条件を生かすための早いスタートが未来を切り開く大きな条件になると思うのですが、学年の切り替わるこの時期こそ気持ちを切り替える上で、多くのチャンスがあると思います。勇気ある一歩を踏み出す時です。